研究ノート

お塚を見直す
――稲荷山の民間信仰――
Folk Religion of *Otsuka*

橘弘文*
TACHIBANA Hirofumi

This paper is concerned with folk religion of *otsuka*, Mt. Inari, Fushimi-Inari. Mt. Inari hikers witness a lot of stone monuments inscribed with names of gods. These sacred stones are called *otsuka*. Formerly *daisan* who were folk religion specialists of possession have led people to build *otsuka*. This paper, focusing on one particular shrine named shirataki on Mt. Inari, examines material and form of *otsuka*, names of gods, and people who had been made donated money to be built *otsuka*. The paper is articulated worship process of *otsuka*.

キーワード：稲荷山（Mt. Inari）、お塚（*otsuka*）、ダイサン（*daisan*）、白滝社(Shirataki shrine)

はじめに

19 世紀後半に、伏見の稲荷山に神の名を刻んだ石碑を建立し、祭祀する人びとが次から次へと現れはじめた。彼らは、一の峰、二の峰、三の峰をはじめとする稲荷山の古代からの祭祀空間のすぐ近くにそれらの石碑を建立した。それらの石碑が、明治 20 年（1887）前後から、お塚と呼ばれるようになる（中嶋 2011:527-529)。お塚は伏見稲荷大社によって建立されたのではなく、稲荷神を信仰する人びとによって自発的に造られた。やがて、お塚を信仰する人びとが、お塚に至る稲荷山の参道に鳥居を奉納する。お塚の石碑群と朱の鳥居の列という新しい風景が稲荷山に点在するようになった。

少数だが、不動明王像などの石像のお塚もみられる。また、石板に絵が描かれているお塚も建てられている。多くのお塚には石製の鳥居、木製の朱の鳥居、狐像、ろうそく立てなどが奉納されている。お塚ということばは、石に刻まれた名の神や石像および絵が表象する神を指すこともあれば、石碑や石像が設置されている石もしくはコンクリートの台座を合わせて指す場合もある。お塚ということばが鳥居や狐像などの奉納物を含めて指す場合もあれば、神の名が刻まれた石碑が密集している空間全体を指す場合もある。この小文では、議論をすすめてゆくために暫定的に「神の名が刻まれた石碑ならびに神を表す像」をお塚と呼ぶことにする。

明治 35 年（1902）には、お塚の数は 633 基だったが、昭和 7 年（1932）には 2254 基に増加した（中嶋 2011:529-530)。昭和 40 年（1965）と 41 年(1966)に伏見稲荷大社がおこなった調査では 7762 基のお塚が確認されている。この調査報告が『お山のお塚』(伏見稲荷大社 1965）と『続お山のお塚』(伏見稲荷大社 1966）にまとめられた。『お山のお塚』と『続お山のお塚』では、お塚の神名がアイウエオ順に掲載され、それぞれのお塚が建立されている地区名、そしてお塚の台座番号が記録されている。くわえて、それぞれのお塚の位置を示す図が『別冊　お山のお塚　塚台配置図』(伏見稲荷大社 1966）として刊行された。

1965～66 年の伏見稲荷大社による調査から半世紀以上の時間が流れた。今、お塚はどうなっているのか。そして、お塚とは、いったい、何なのか。この小文では、『お山のお塚』と『続お山のお塚』を貴重な基礎資料として、お塚を、以下の①～④の項目にそって、文字通り見直すことを通して、これらの問いに接近したい。

① お塚の形と材質
② お塚の神名と数
③ お塚の建立者
④ お塚の建立年

この小文では白滝地区（白滝社を指す。お塚の建立地区名を示すために、以下、白滝地区と記す）のお塚に焦点を合わせる。稲荷山の荒神の峰から南に降りた谷に滝が流れ落ちている。この滝行場のすぐそばに白滝大神とい

*大阪観光大学観光学部/民俗学

うお塚が祭祀されている。『続お山のお塚』によれば、白滝地区には 77 基のお塚の台座が確認されている。お塚の群在地の近くには茶店があるが、白滝地区にも白滝大神の斜め向かいに茶店がある。

1.　お塚の形と材質

お塚は、その石の形状に基づいて次のような型に分類できる。

A 型：自然石もしくは自然石を模した形

B 型：加工された形

C 型：石像

白滝地区では A 型（写真 1）が大半を占める。五来重は「自然石を宗教の対象にするのは、自然宗教である山岳宗教や原始宗教に多い」と指摘する（五来　1988）。A 型は、お塚の信仰が山岳宗教を基盤にしていることを反映しているのかもしれない。稲荷山の山頂は標高 250m に満たないが、稲荷山はいくつもの峰と多くの谷からなる複雑な地形を呈しており、古代より山岳修行の場とされてきた。伝説によれば浄蔵や仁海も稲荷山で修行した。現代においても、深夜に稲荷山をまわり、稲荷山の滝で修行する人びとの姿がみられる。興味深いことに稲荷山は山岳修行の場でありながら女人禁制の山にはならなかった。B 型の中には屋根の形をもつ角柱のお塚が多くみられる（写真 2）。また B 型には丸みを帯びた形に加工された石碑や角柱型の石碑もある（写真 3）。C 型の多くでは不動明王像が祭祀されている。不動明王像は滝修行に関連していると考えられる。C 型の中に福吉大勝軍像と玉富弁財天像のセットのお塚がみられる（写真 4）。これらの石像は、お塚が仏教と深い関係にあることを示している。

お塚の大きさは一様ではない。４m ほどの高さのお塚もあれば、50cm くらいの高さのお塚もある。だいたい、高さ約１m、幅 70～80 cm のお塚が多くみられる。

お塚は石もしくはコンクリートの台座の上に設置されている。一つの台座の上に一つのお塚が設置されている場合もあれば、一つの台座の上に複数のお塚が設置されている場合もある。台座にはお塚の建立者名や信者名などの情報が刻まれている。

たいていのお塚は野ざらしになっているが、雨風をしのぐ屋根のある社で祭祀されているお塚もまれにある。それらの社には幕、御簾、鈴、賽銭箱などもそなえられている。白滝地区には屋根付きのお塚が３基ある。

ところで、当初、お塚は「木の枝を盛り土に突き立てて」いたが、早い段階でお塚の材質は木の枝から石に変わった（ブッシイ 2009：76-77）。盛り土に木の枝を突き立てたものは、独力で容易に造ることができ、費用もほとんどかからない。盛り土に突き立てられた木の枝は、そこに祭祀される神とともに稲荷山を表象していたと思われる。しかしながら、盛り土に木の枝を突き立てた形体は壊れやすく、持続性に欠ける。これに対して、石碑は、建立の経費はかかるが耐久性がある。そのうえ石に神の名と祭祀者の名を刻むことができる。石碑の建立には、石の加工や彫刻、設置などに専門業者の技術と労力が必要になる。

いっぽう、石の信仰が稲荷山の信仰の根本にある。応仁元年（1467）６月に稲荷山に参籠した金春禅竹の記録によれば、稲荷山の「上の御前（上社）」に「尾薄の明神」が祀られ、その背後に石の神体があった（伊藤 1969:53）。至徳３年（1386）に書写された「命婦事」などの記述は、「尾薄」は稲荷神に仕える狐であったと伝える。最初に石碑でお塚を建てた人が自覚していたかどうかは別にして、お塚＝石は、＜稲荷山―石―狐＞という信仰と絶妙につながっている。

2.　お塚の神名と数

上田正昭は、お塚に記された神の名には庶民信仰の多様性が反映しているとのべ、お塚の神名の①～⑤の特色をあげている（上田 1983：281-284）。

①　『古事記』や『日本書紀』の神話に由来する神名

②　各地の有力な神社の神名

③　神階のつく神名

④　神仏混淆・神仏習合の神名

⑤　福をその名におびる神名

白滝地区のお塚の神名も上田の指摘する特色をそなえているが、白滝地区では「白」の文字をふくむ神名が目立

つ。たとえば、以下のような神名がみられる。白幸大明神、白王大明神、白滝清平神社、白登大明神、白常霊神、白石姫大神、白川明神、白菊大神、白鹿大神、白繁大神、白高大神、白滝大神、白玉大神、白豊大神、白永明神、白浪大神、天光・月正白山大神、白吉大神、白日家大神、白常大神、白姫大明神、白子大神、天光白寿大神、白虎大明神、白丸大神、白春大神、白保大神、白木大神、白光大神、白芳明神、白一大神、白竹大神、白芳明神、珠白狐稲荷大明神、白雲大神、白國大明神、白久大神、白松大神、白米大神、白源大明神、白石大神、白蛇大神、白雪大神、白豊大神、白白大神、白福大神、白長大明神、白天大神、白鷹大神、白髭大神、金白大神、白竜大神。

白滝地区には 77 台のお塚の台座があり、お塚に記されている神名の総数は 487 基にのぼる。つまり、一つの台座に複数の石碑が安置されている場合や、一つの石碑に複数の神名が記されている場合が多くみられる（写真 5）。こうした、お塚の神名の複数性は、お塚の信仰の共同性によって説明できるかもしれない。お塚の建立には、それなりの経費がかかる。そこで何人かの人びとが共同でお塚を建立する。そのさい、それぞれの個人の信仰する神の名があわせて一つの石碑に記され、あるいはいくつかの石碑が一つの台座に設置されることになった、と思われる。

3.　お塚の建立者

お塚の建立にかかわったと思われる個人名や組織名が、お塚の台座に記されている。ただ一人の個人の名だけが記されている場合もあるが、多くは複数の氏名が列挙されている。これに対して複数の組織名が記されている台座は、今のところ、みあたらない。お塚の台座に記されている組織名は信仰集団名と企業名に分けられる。たとえば、白滝地区の梅八大神の台座には「大阪榊講社」の下に多くの個人名が記されている。おそらく梅八大神を信仰する人びとが集って「大阪榊講社」を結成し、梅八大神のお塚を建立したと推測される。いっぽう、辰巳大神の台座には「日本地下水工業株式会社」と記されている。

お塚の台座の中には「発起人」や「世話人」のような個人の役割を示す文字が記されている台座もみられる。白滝地区の白竹大神の台座には 2 人の個人名にそれぞれ「施主」と「教師」の肩書きが添えられている。おそらく「教師」が白竹大神のお塚の建立を「施主」にすすめ、「施主」が建立費を負担したのだろう。白滝地区の松浪大神の台座には「代」の肩書きとともに一人の女性名が記されている。この「代」はダイサンやオダイとよばれる民間宗教者を指していると推測される。ダイサンやオダイは、しばしば「先生」ともよばれることがあるので、白竹大神の「教師」も民間宗教者である可能性が高い。

かつて福吉大将軍のお塚の横に福吉大将軍について書かれた石碑が建っていた。この石碑は、1968 年 8 月 18 日の大雨で白滝地区の東側の斜面の一部がくずれたために、福吉大将軍のお塚の隣から現在の場所に移された（写真 6）。この碑文は高さ約 130 ㎝、横幅約 70 ㎝の石に刻まれている。『続お山のお塚』では福吉大将軍と表記されているが、碑文では「将」の字に「勝」の字があてられている。大正 10 年（1921）1 月、浪花の南九堂によって書かれた碑文の文章を、以下に提示する（原文は縦書き）。

此處に勧請し来る福吉大勝軍は大阪市東区徳井町弐丁目都筑家の藏
處に幾百年の星霜を経て霊験いみじき龍体に御在しぬ明治四十五季出現
のことあり人に憑りて宣玉ふ様予都筑氏か家の疾患を癒えしめむとすされは
人間は誠を以て第一とす誠無けれは感応は覚束なし今真心を以て予を祀り予
を祈らは総ての願望を成就せむといふことなしかくて同年四月一日尊霊を祭壇に
遷し来る以来度々の御奇瑞あり又御告に依りて佛と崇め御祭を怠らす遠
近に傳へて利益を蒙れる者多し妃を玉富弁才天と称へ真名子を清經丸
清丸と称へ来る茲に碑を建て勒して以て不朽に傳ふとなん云

この碑文は、おおよそ、次のような内容を伝えている。

大阪市東区徳井町２丁目の都築家の蔵に数百年を経た福吉大勝軍が、明治 45 年（1912）に出現した。福吉大勝軍がある人に憑依して、こう語る。「わたしが都筑氏の家の疾患を治癒しましょう。人間にとって誠が第一です。誠がなければ信心が神仏に通じることはむずかしいでしょう。今、真心をこめてわたしを祀り、わたしに祈るならば、どのような願望も成就しないということはありません。」　そこで同年（1912）４月１日に福吉大勝軍を祭壇に移した。それ以来、福吉大勝軍によって不思議な現象が何度も起こった。そして、福吉大勝軍のお告げにしたがい、福吉大勝軍を仏として崇敬し、福吉大勝軍を祭ることを怠らなかった。遠近の人びとに福吉大勝軍のこ

とを伝えると、福吉大勝軍の利益をこうむる者が多かった。福吉大勝軍の妃は玉富弁才天といい、お子さまは清経丸、清丸という。ここに石碑を建て碑文を刻むことによって、福吉大勝軍は永く伝わるであろう。

明治 44 年（1911）の『地籍台帳』（宮本　2006）に中に、都築亥三郎の名が東区徳井町 2 丁目に見出されるので、上述の碑文の都筑家は実在した。福吉大勝軍は人に憑依して託宣する。託宣にしたがい、福吉大勝軍は都築家の蔵から都築家の祭壇にうつされた。さらにまた、福吉大勝軍は人に憑依し、「仏」として崇敬せよと託宣する。これらの憑依と託宣には民間宗教者が関与したと思われる。

福吉大勝軍の台座に「大正八年十月　都筑亥三郎　外 46 名　有志者」と記されているところから、大正８年（1918）10 月に都築亥三郎と 46 名の有志の人びとが、福吉大勝軍のお塚を建立したことがわかる。福吉大勝軍のお塚は、神名が刻まれた石碑の形でなく、石像で祭祀されている。福吉大勝軍と玉富弁財天の石像は石製の厨子の中に安置されている（写真４）。福吉大勝軍像は、下向きに立てた剣の柄を右手で握り、左手を剣の柄の端にのせている。玉富弁財天像は一本の蓮の茎を両手で持っている。

福吉大勝軍について書かれた碑文は、お塚の建立のプロセスの一端を明らかにする貴重な資料でもあるといえる。

4.　お塚の建立年

お塚の建立年も台座に記されている。しかしながら、経年磨滅によって判別できない文字も多い。白滝地区では 1968 年８月の山崩れの影響で、近づくことが困難なお塚も少なくない。あくまで暫定的に現在のところ確認できている白滝地区のお塚の建立年を以下に提示する。

頼房大明神・末廣大明神・光時大明神：大正 7 年（1918）10 月
福吉大将軍：大正 8 年（1919）10 月
白雲大神：昭和 5 年（1930）初午
旭山大神：昭和 5 年（1930）
白長大明神：昭和 10 年（1935）10 月吉日
玉鶴大神：昭和 17 年（1942）9 月吉日
豊広大神：昭和 18 年５月
辰巳大神：昭和 18 年（1943）
巳陽大神：昭和 19 年（1944）11 月吉日
白鷹大神：昭和 35 年８月
白光大神：昭和 38 年（1963）11 月吉日
白神大神：昭和 40 年（1965）6 月
稲荷大神：昭和 40 年（1965）
眼力不動明王：昭和 41 年（1966）7 月 15 日
神徳大神：昭和 45 年（1970）正月
白髭大神：昭和 58 年（1983）
白永大神：平成 15 年（2003）1 月

白永大神の台座に記されている「平成十五年一月吉日」は、お塚が建て替えられたときの年代であり、最初の建立年についてはわからない。白滝地区にも玉垣が奉納されている。石製の玉垣に奉納者名と奉納年が記されている。その中に「明治四十三年一月」と記された玉垣がある。また、白滝地区に至る坂道に 41 基の鳥居が奉納されている。これらの鳥居のうち、２基が石製で、１基に「大正四年八月」、もう１基に「大正七年七月吉日」の文字がみえる。この坂道の傍らに「白瀧参道敷石工事」の碑がある。その碑には「有志者」31 名の氏名が記され、末尾にその碑の設立年月日が「大正十年十二月吉日」と記されている。白滝地区のお塚は、明治時代の末期に建立が始まり、大正年間から戦前・戦中にかけて盛んに建立され、戦後の空白期間の後、1960 年代になって再び建立が活発になったといえる。

まとめ

アンヌ・ブッシイは、お塚に関して、「今日では様々な神名を刻まれた石碑が一万以上もあるが、これはオダイ

の神の数の多さと稲荷山へのオダイの愛着の証である」と述べている（ブッシイ 2009：77）。ダイサン（オダイ）の砂澤たまゑは、1972 年から 2004 年にかけて、稲荷山の御膳谷に 8 基のお塚を建立したと語っている（砂澤 2004：144-145）。お塚の建立へのダイサンの関与は、お塚の台座に刻まれた「代」や「教師」などの文字からも確認できた。

神霊がダイサンにお塚の建立を指示する。ダイサンがお塚の建立を信者たちに提案する。ダイサンの提案に賛同した信者たちが費用を共同で出資する。そして石工が石碑を造り、稲荷山に石碑を設置する。このようなお塚の建立プロセスが推測されるが、お塚の注文主であるダイサンと石碑の石造業者の間に茶店が関わっていた。

茶店は、お塚の建立だけでなく、鳥居などの奉納物の更新などにも関わってきた。鳥居が朽ちてきたとき、茶店が信者に新しい鳥居の奉納をすすめる。信者が鳥居の奉納を承諾すると、茶店が業者に依頼する。茶店の活動は一見するとエージェントのように見えるが、茶店はお塚が群在する地所を実質的に管理する重要な役割を果たしている。

稲荷山の峰々の祭祀空間を指し示すことばとして、おそくとも中世以降、「社」や「宮」の他に「塚」が使われていた（大場 1967：27）。明治 20 年（1887）前後に神の名が刻まれた石碑がお塚と呼ばれるようになった経緯は不明であるが、神の名が刻まれた石碑は、お塚の呼称を得たことによって、前近代からの稲荷山の信仰と一体化したといえよう。

お塚はダイサンと信者と茶店の三者の協力によって造られ維持されてきた祈りの場であるが、近年、ダイサンの活動が目立たなくなりつつある。たとえば、白滝大神の信仰団体の一つである白滝奉賛会には、現在、ダイサンはいない。おそらく他のお塚においても、ダイサンのいない状態で、お塚の信仰が実践される傾向にあると思われる。

（写真１：自然石を模したお塚）

（写真２：屋根型のデザインのあるお塚）

（写真３：丸みを帯びた形に整形されているお塚）

（写真４：福吉大勝軍のお塚。左が福吉大勝軍、右が玉富弁財天。）

（写真５：一つの石碑に多数の神名が刻まれているお塚）

（写真６：［左下］福吉大勝軍の勧請について記された碑）

【引用・参考文献】

伊東正義(1969)「「稲荷山参籠記」私注（二)」『朱』 6 号、pp.50-56。
上田正昭(1983)「お塚の信仰」直江廣治編『民衆宗教史叢書第三巻　稲荷信仰』雄山閣、pp.281-285。
大場磐雄(1967)「「お塚」再考」『朱』 3 号、pp.26-31。
五来重(1988)『石の宗教』角川書店
砂澤たまゑ(2004)『霊能一代』新元社
中嶋節子(2011)「稲荷山の景観」上田正昭監修『伏見稲荷大社御鎮座千三百年史』伏見稲荷大社、pp.501-540。
伏見稲荷大社(1965)『お山のお塚』伏見稲荷大社
伏見稲荷大社(1966)『続お山のお塚』伏見稲荷大社
アンヌ・ブッシイ(2009)『神と人のはざまに生きる　近代都市の女性巫者』東京大学出版会
宮本又郎監修(2006)『地籍台帳・地籍地図[大阪] 1911（明治 44）年 第 5 巻 台帳編 大阪市東区及び接続町村』柏書房